WISS 論文投稿用サンプル

匿名で査読を行うため著者名なし*

概要は和文 600 文字程度で書く. (WISS2012 より概要は和文のみとなった) 概要サンプル 概要サ ンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サ ンプル 概要サンプル概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル概要サンプル 概要サ ンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サ ンプル 概要サンプル概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル概要サンプル 概要サ ンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル 概要サンプル

1 はじめに

この Latex2e 用スタイルクラスは、WISS 2013 における論文投稿用である。2013年における重要な 変更として、論文投稿原稿には著者名を記入しては ならないこととなったので注意されたい。著者各位 においては、WISS のホームページ [1] および以下 の注意を熟読して効率的な論文執筆をされるよう望 む. やむをえず Word などの他の手段で原稿を書く 場合は、限りなく同じ形式に仕上げること、著しく 異なる形式の場合,不採録の理由となる場合がある.

2 論文執筆について

2.1 全般的な注意事項

このスタイルクラスを利用するには、wiss.cls, wissbase11.cls, jwiss.bst をコンパイラが参照 できるパスに置く.通常は TFX 文書ファイルと同 じディレクトリに置けば自動的に参照される. また TFX 文書の先頭にある\documentclassでwissを 指定する.全体としては右の枠線内のようになる.

論文の文体は「だ」「である」調, 句読点は「,」 「」を強く推奨する。図のレイアウトなどの特別な 場合を除いて本文は2段組とする. 原稿はA4サイ ズ pdf 出力し、上下左右のマージンは厳守しなけれ ばならない. また、ページ数は必ず規定のページ数 でなければならない.

Overfull (規定の枠内からはみ出して文字を書くこ と)してはならない。本文中や参考文献で長いURL のように Overfull が発生することがある。必ず仕上

がりを確認し、このようなことが起きないように文 章を調整する。はみ出した部分については編集者に おいて削除することがある.

```
\documentclass[twoside] {wiss}
\journalhead{...}
\begin{document}
\title{...}
\etitle{...}
\author{...
    \affil{...}}
\begin{abstract}
\end{abstract}
\maketitle
\section{...}
本文...
\bibliographystyle{jwiss}
\bibliography{...}
\begin{figure*}[!b]
未来ビジョン関連の latex 記述
\end{figure*}
```

2.2 表題,著者名,概要

などを書き入れると、http://www.sample.url.xx.yyy/而方に書く、\journalhead{}に書かれたタイトル 和文タイトルを\title{}と\journalhead{}の として現れる.

Copyright is held by the author(s).

匿名で査読を行うため所属名なし

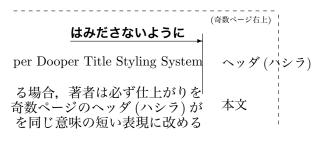


図 1. ヘッダの例

原稿を作成する場合、著者は必ず仕上がりを確認する。3ページ以上の原稿については、3ページ目以降の奇数ページのヘッダ (ハシラ) がページ幅を越えないようにする (図1). 越えそうな場合には著者において\journalhead{}中に書くタイトルを同じ意味の短い表現に改めること。ヘッダ (ハシラ) は途中で改行してはならない。また、\journalhead{}の中を空にしてはならない。なお、ページ番号はページ下部中央に書き込まれる。

投稿時には、著者名は記入してはならない。の中 身は変更せずこのままにしておくこと

アブストラクト (論文概要) は,2007 年からは \begin{abstract}と\end{abstract}の間に,600 文字程度の和文のいずれかで書くように変更となったので注意されたい。2012 年からは英文は廃止された。

2.3 本文

\section{}, \subsection{}など, スタイルクラスで用意されている章立てを用いながら, 通常の ET_{FX} 2_{ε} 文書執筆の要領で書く.

図表は、査読用投稿の場合には査読者が十分読みとれるよう配慮する。カメラレディ原稿は提出したものがそのまま印刷、出版されるので、十分な画質があるように著者において出力すること。なお、写真などもすべて原稿中に組み込んで出力すること。

2.4 謝辞,参考文献

謝辞は、ブラインドレビューのため、投稿時には削除すること.

参考文献は JBIBTEX を用いて文献データベースから自動生成することを強く推奨する。文献スタイルは jwiss を使う。手書きで作成する場合には,文末の例のように著者名,論文名,所収冊子名 (英文の場合には斜体),ページ番号,発行年の順で書く。英文で著者名を書く場合には,名 (first name) のイニシャル,姓 (last name) の順に書く。共著者が多い場合には「et al.」で省略してもよい。なお,参考文献に URL を指定する場合には,そのページが存在していることを投稿前に必ずもう一度確認すること。ニュース記事のように短い期間で URL が変更されたりページ自体が消滅する恐れのある Web



図 2. 図面の例

ページは参考文献として好ましくない.

2.5 未来ビジョン

未来ビジョンについては、必須とせず任意とする. 論文本体とは別に、「この研究はどういう未来を切り 拓くのか」について、著者の視点からアピールした い点があれば、最終頁に欄を設けて設けて自由に議 論してください。枠の大きさの改変はしてはならな い。枠内であれば、ある程度改変してもよいものと する。

3 論文作成の例

\section{論文作成の例}と書くと上のように表示される。

3.1 図表挿入の例

\subsection{図表挿入の例}と書くと上のように表示される.

3.1.1 表の例

\subsubsection{表の例} と書くと上のように表示される。表 1 は表の例である。

表 1. 食欲を満たす方法と特徴.

	値段	スピード
高級料亭	高い	遅い
ファミリーレストラン	中ぐらい	中ぐらい
ファーストフード	安い	早い

図の例

\subsubsection*{図の例}と書くと上のように表示される。アスタリスク(*)をつけたことにより番号が表示されない。図2は論文中に図面を挿入した例である。

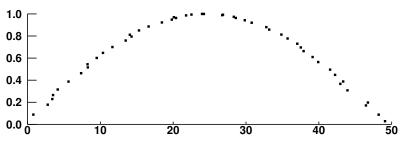


図 3. グラフの例

図3は、2段抜きの図の例である。2段抜きの図を挿入するときには、\begin{figure}の代わりに\begin{figure*}とし、\end{figure*}で終わるようにすればよい。同様にtableについても*をつけることで2段抜きにできる。

ただし2段抜きの図や表は、IFTEXによって別のページに移動して張り付けられてしまうことが多いので注意が必要である。

原稿を作成する場合,著者は必ず仕上がりを確認し、図が鮮明に出力されることを確認する。特に,次の2点に留意すること。

- 画面キャプチャした画像を使って図を作る際, 非可逆圧縮を使わないこと。画面キャプチャ した画像をファイルに保存する場合には,保 存形式として非圧縮形式 (BMP等)または可 逆圧縮形式 (GIF, PNG等)を用いる。
- 図に文字を使って注釈を書き込む場合,極力, アウトラインデータの文字を用いること. ビッ トマップデータの文字を用いた場合,文字の 輪郭がギザギザに見える.

3.2 数式の例

\subsection{数式の例}と書くと上のように表示される。

式(1)は数式の例である.

$$\sum_{n=1}^{N} n = \frac{1}{2}N(N+1) \tag{1}$$

4 まとめ

このサンプルは次の環境を用いて動作を確認した.

- UNIX 用の plateX 2ε (pTeX3.1.2)
- Windows 用の pI⁴TEX 2_€ (pTEX3.1.3)
 本スタイルシートが著者諸氏の論文作成に役立つことを期待する。

謝辞

謝辞は、ブラインドレビューのため、投稿時には 削除すること. カメラレディ時に、必要があれば追 加すること.

5 **てすと**

てすとてすとてすとてすとてすとてすとて すとてすとてすと、てすとてすとてすとてす とてすとてすとてすとてすと、てすとてすと てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす と. てすとてすとてすとてすとてすとてすと てすとてすとてすと、てすとてすとてすとてすとて すとてすとてすとてすとてすと、てすとてす とてすとてすとてすとてすとてすとてすとて すと. てすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすとてすと. てすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと てすと、てすとてすとてすとてすとてすとて すとてすとてすとてすと、てすとてすとてすとてす とてすとてすとてすとてすとてすと、てすと てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすと、てすとてすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと、てすとてすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすと、てす とてすとてすとてすとてすとてすとてすとて すとてすと、てすとてすとてすとてすとてす とてすとてすとてすと、てすとてすとてすと てすとてすとてすとてすとてすとてすと. て すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと てすとてすと、てすとてすとてすとてすとて すとてすとてすとてすと、てすとてすとてす とてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと、てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと、 てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと

てすとてすとてすとてすと、 てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと. てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと、てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと、 てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと. てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと、てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと、てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすと、てすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと、 てすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすとてすとてすと、てすとてすと てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす と、てすとてすとてすとてすとてすとてすと てすとてすとてすと、てすとてすとてすとて すとてすとてすとてすとてすと、てすとてす とてすとてすとてすとてすとてすとてすとて すと、てすとてすとてすとてすとてすとてす とてすとてすとてすと、てすとてすとてすと てすとてすとてすとてすとてすと、てすとて すとてすとてすとてすとてすとてすとてすと てすと、てすとてすとてすとてすとてすとて すとてすとてすとてすと、てすとてすとてすとてす とてすとてすとてすとてすとてすと. てすと てすとてすとてすとてすとてすとてすとてす とてすと、てすとてすとてすとてすとてすと てすとてすとてすとてすと、てすとてすとてすとて すとてすとてすとてすとてすとてすと. てす とてすとてすとてすとてすとてすとてすとて すとてすと、てすとてすとてすとてすとてす とてすとてすとてすとてすと.

文章量が増えると、本文と未来ビジョンが重なる ため、重ならないように文章量を調整すること.

参考文献

- [1] WISS ホームページ. http://www.wiss.org/.
- [2] H. Aoki, B. Schiele, and A. Pentland. Realtime Personal Positioning System for Wearable Computers. In *Proceedings of the 3rd IEEE International Symposium on Wearable Computers*, pp. 37–43, 1999.
- [3] 暦本 純一. まえがき: WISS2000 について. インタ ラクティブシステムとソフトウェア VIII, pp. i-ii. 近代科学社, 2000.

未来ビジョン

(本行を含む下記の説明を削除してから、記入すること。)

未来ビジョンについては、必須とせず任意とする。論文本体とは別に、「この研究はどういう未来を切り拓くのか」について、著者の視点からアピールしたい点があれば、このような欄を設けて設けて自由に議論してよい。例えば、「こういう未来社会が到来して欲しいから、我々の研究でこう貢献していきたい」、「主張が大きすぎて本文中では書きにくかったが、この研究は、実はこういう気持ちで研究している」、「現在の実装では、小さいトピックであるかのように誤解を招きやすいが、本当はこういう大きなことを狙って、その第一歩として研究に取り組んでいる」のように、研究の未来、魅力を語る場として利用できる。大きさや形

状はこのサンプルを目安とするが、この枠内であればある程度改変してもよいものとする.



